

第63回 卒業式 式辞

春の訪れを予感させるうららかな日に、かつて経験したことのない大きな地震と津波が日本を襲い、数え切れぬ尊い命が奪われ、今も懸命の救援活動が続いています。被災された皆さまに心からお見舞いを申しあげます。

こうした中で、224名の卒業生の皆さんが、晴れて卒業式を迎えることができました。今日まで諸君たちを慈しみ、育てこられた保護者の皆さんが見守るなか、先輩たちを送りたいという思いで駆けつけてくれた在校生諸君と一緒に、そして、諸君たちが慣れ親しみ、昨日臨時休校の中で先生方が手分けして磨き上げてくださった校舎で、晴れの卒業式を挙行できますことは無上の喜びです。

本校をいま巣立ち行く卒業生諸君、そして保護者の皆様、あらためまして、ご卒業おめでとうございます。

また、ひとときわご繁忙の中、ご来駕の栄をたまわりました東京都議会議員吉田康一郎様、中野区青少年育成上鷲宮地区委員会委員長星川真喜子様、武蔵丘同窓会会長春木剛史様、武陵会の高羽富美香会長を始めご来賓の皆様、本校前教務主幹、現在駒場高校副校長の青木永二様に、高い席からではございますが篤く御礼を申しあげます。

さて、長い歳月の中で形づくられ、洗練されてきたものには、魂を魅了してやまない美しさがあります。

しかし、どんなに手塩にかけたものでも、手入れを怠って放置しておく、埃がたまったり、傷ついたり錆びついたりしてしまうのが世の常です。

学校も例外ではありません。長い伝統を誇るほど、目覚しい躍進を果たす時があれば、気づかぬうちに停滞し澱んでしまう時もあります。だからこそ、過去の栄光に甘んじることなく、細心の注意を傾けて点検し、たとえ自分に不都合なことがあっても目をつむることなく、心を奮い立たせて課題を見抜き、力を合わせて解決に取り組んでこそ、みずみずしい生命感と躍動感を宿し続けることができるのです。

それを象徴するのが、君たち卒業生が中心となって創りあげた今年度の体育祭でした。

あの体育祭は、日本中を沸かせたサッカーのアジアカップと、どこか似ているように思えてなりません。キーパーの退場、終了間際の同点でのPK戦。絶体絶命のピンチが続き、勝てるはずがないと諦めていた日本チームが、結束を固めて、試合ごとにヒーローが変わる総力戦を繰り広げ、遂に決勝の延長戦で、見事な連携から決勝ゴールを生みだしました。

思い出してください、体育祭の前日のリハーサル。連携がうまくとれない。至るところで計画通りに進まない。頭を抱え、目を覆い、胃が痛くなるような

惨憺たる有様に、「敗北」を予感した人は少なくなかったはずで

そうした中で、準備時間の不足など一言の言い訳もせず、たった一日で軌道修正を果たし、絶体絶命のピンチを覆して体育祭を大成功に導き、圧倒的な感動を創り出したのは、紛れもなく君たちです。

確かに、完成品のようなピカピカの美しさはなかったし、むしろ無骨できえあった。でもそこには、何としても自分たちの力で成功させるんだという気迫と強い絆がみなぎり、若者らしい清々しく美しい生き方が光り輝いていました。

あの時、武蔵丘高校の歴史が、大きく動いたのです。その歴史的な瞬間に、君たちと時間・空間を共有できたことを、私は校長として心から誇りに思います。

あの体育祭が出発点となり、新しい武蔵丘高校を創る取組が軌道に乗り出しました。その後武蔵丘は、70周年事業の成功を経て、勉強や部活動の面でも、進路や生活指導の面でも力を高め、全人教育と進路指導に取組む中堅上位の進学校として、「学力向上開拓推進校」と「部活動推進指定校」に加えて新たに「重点支援校」の指定を受けることになったのです。

重点支援校への教育委員会からの応援は絶大です。すでに、新一年生 290 名分の新しい机と椅子の購入、いつ壊れるか分からず入試のヒアリングで肝を冷やした放送設備の全面リニューアル、部員が急増している吹奏楽部の楽器の購入など、心のこもった支援をたくさんいただいています。

こうした変化や成長に、中学生やその保護者の皆さんの反応はたいへん敏感で、今年度の入試では、推薦は男女とも4倍を超え、学力検査は男子 1.70 倍、女子 1.96 倍となり、一年おきというジンクスを打ち破り、昨年度の高い倍率をさらに上回る前進を果たしました。

これらは、卒業生諸君たちが全校をリードし、二年生、一年生とともに武蔵丘に残してくれた貴重な総りです。卒業生諸君一人ひとりに、そして本校の努力を高く評価して重点支援校に選んでくださった都立学校教育委員会学校経営指導担当の課長で、教育委員会を代表して本日お越しの鈴木正一様に、心からの感謝を捧げさせていただきます。

卒業生諸君が切り拓いた地平は、これにとどまりません。

特に意義深いのは、我が校が今年度から掲げた「利他の志」の片鱗を、実際の姿で私たちにを見せてくれたことです。私たちを取り巻く近現代文明は、地球の環境を破壊し、人々の幸せと心の豊かさを支えてきたコミュニティを崩壊させるなど、深刻な綻びを露わにしています。

その元凶が、己の利益に固執する「利己の最優先・絶対化」にあった疑いは濃厚です。しかし、一時は持てはやされた、他人を蹴落としてでも勝ち組になる「自己中心的な生き方」は今や急速に色あせ始めています。代わって注目を集めているのが「利他の志」です。でもちょっとやっかいな問題があります。

どの辞書を引いても、「利他とは、自分を犠牲にして他を利すること」と説明されているのです。さきやかでも世のため人のためになりたい。でも自分を犠牲にできるか、「利己」を完全に消し去ることができるか・・・。

かつての日本人には当たり前でも、久しく日陰の身に甘んじているうちに、「利他の志」は、「利己」と「利他」との激しい対立、そして葛藤という新しい問題に揺らいでいます。

それを解く鍵が、あの体育祭で見せた君たちの姿にあります。君たちは、自分は負けたくない、いい成績を収めたいと力を尽くした。あの君たちの行動は「利己」だろうか。それとも「利他」だろうか・・・。答えは両方です。全力で自分の利益を追い求めることが、チームの勝利につながる。だからこそ戦い、だからこそ感動が生れた。

そしてもう一つ。あの時君たちは、チームに貢献するために、自分を犠牲にしたのだろうか。棒倒しで「守る側」になり、わずかばかりの運の悪さを恨んだかもしれない。しかし、みんなが自分の役割を見つけて必死に果たし、犠牲どころか自分を存分に活かしてチームに貢献したに違いないのです。

でも、世の中は、体育祭のように、「利己」の追求が「利他」にすぐつながる場合だけではありません。もっともっと複雑で、家族、仕事場、隣り近所など、お互いの利害がぶつかる局面がたくさんでできます。そうした中であっても、皆さんが「利他の志」を発揮できる見事なコツを、昔の人が残してくれているそうです。日本の能を確立した世阿弥という人が「華鏡」という書物に記した「離見の見」という考え方がそれです。

「離」は離れる、「見」は見ると書きます。つまり、自分を離れて見るという意味です。能を演じる者が、自分の方からだけ見ていたのでは、自分の舞を正確に捉えることはできません。

そこで、自己を離れて、客席にいる観客の立場、自分を含む全体から自分の舞を見ると、良い点も悪い点も客観的に見えてくるわけです。この「離見の見」を磨くことで、狭い自分の都合や利害で目が曇ることなく、独りよがりにも陥ることなく、環境や全体から自分を捉えることができるようになり、自分に何が求められ、力をどう発揮すれば、全体に貢献できるのかが見えてくるのです。これこそ、「利己」と「利他」を一体化する極意です。すぐにはできっこないと思うかも知れませんが、慌てることはない。能の世界では、六十歳ぐらいでやっと新進気鋭の駆け出しなのです。じっくり時間をかけて努力を重ね、人としての器を上げながら「離見の見」を磨いていけばよいのです。

大震災のニュースで、一人の女子高生が自分の学校の体育館で暮らす千人以上の被災者の朝昼晩の食事作りをしていました。自分も家を失くしたそうです。「大変だね。これからどうするの」というインタビューに彼女は、「みんなで支え合いながら生きていければいいんです」とさわやかな笑みをたたえて答えて

いました。自分を取り巻く環境全体の中で、一番貴いものは何かを、そして自らの生き方を短い言葉に込めて語った女子高生。武蔵丘高校の生徒なら、彼女と心をついにできるはずです。

日本は、厳しい時代を迎えています。電力供給もままなりません。スーパーやデパートの営業時間も短くなりました。電車の本数は減少し、乗るにも降りるにも一苦勞です。確かに厳しい環境ですが、一昔前の日本はこうでした。もしかしたら、これが日本の普通の姿になることも想定しなければならないのかもしれないかもしれません。ピンチはチャンスです。世界最高峰の繁栄を体験した私たちが、これに対応できたなら、モノの豊かさだけでなく、地球上生きとし生けるものすべての生命を大切にす新しい文明を築いていく貴重な足掛かりとなるはずです。天地が入れ替わるような激動にもしなやかに対応し、外国メディアも驚く「凛とした気高い精神性」を持ち続けてきた私たちなら必ずできるはずです。私は確信します。近い将来、「利他」という言葉を引くと、「世のため人のために生きること。これが己を生かす最高の道である」・・・どんな辞書にもこう書いてある、そんな時代を、ともに切り拓いていこうではありませんか。その先陣を担う諸君たちの健闘と、幸多き人生を心から祈ります。

平成 23 年 3 月 19 日

東京都立武蔵丘高等学校長 谷島 昭